

○議長（中村 敦君） 次は、質問順位5番 1つ、「海」「山」「まち」「ひと」の課題について。

以上1件について、8番 楠山俊介君。

〔8番 楠山俊介君登壇〕

○8番（楠山俊介君） 清新会の楠山でございます。議長の通告に従いまして、一般質問をいたします。

質問内容を海・山・まち・ひとに大別し、それぞれの課題に対し提案、要望を添えて質問とさせていただきます。

項目1として、海についてであります。海はこのまち、この下田市にとって宝であり、重要な観光資源、地域経済の要であります。世界一の海づくりを標榜し、海の魅力化、活用がまちの命運を握っております。そのキーワードは「海とその隣接地を一体としたビーチリゾート、通年型の海の活用、四季折々の海の魅力化」であります。

これに関しては、6月議会において土屋議員、岡崎議員の一般質問でも、通年の海の運営管理を含め、その重要性が問われていました。通年型の海の魅力化、その活用、そして数々ある海岸、海浜の事情を個性として、特色として、そこに適したソフト・ハードの整備が必要であります。

体験やスポーツなど、主に体を動かして楽しむ活動としてのアクティビティ、多くの人を集めてビーチで行われるイベント、ビーチを訪れる人のために設置された、建物や設備を活用して提供されるサービスとしてのファシリティが必要であります。従来のビーチの活用の在り方にとらわれない新しい魅力を生み出していくことが必要であります。

これらの計画策定や具体的方策については、平成31年3月、観光庁から提示されたビーチの観光資源としての活用化に向けた、ナレッジ集を参考にして組み立てていくことを提案いたします。

では、具体的な整備に関しまして、地元吉佐美区に焦点を絞り質問をさせていただきます。

1、通年型の海の魅力化、活用に対し、その必要性、方向性をどのように認識されていますか。重要性を認識するのであれば、どのように推進していくのか、市民の皆様や対象地区の皆様にもどのように伝えていくのかをお知らせください。

2、海に隣接するスポーツ施設として最適と思われるもの、以前から市民の要望のもの、タイムリーであるものとして、スケートボードパークと3X3バスケットコート吉佐美グラウンド内のテニスコート跡地に設置すべきと思いますが、どのように考えていますか。

スケートボードパークは各所に幾つも設置するわけにいかないと思います。では、下田市に第1号としてできることで、伊豆半島あるいは伊豆南部に初めてできた、この話題、効果は大きいと思います。機を逸しないようにすべきと思います。

3、通年型の海利用が増え、来訪者が増えることに伴い、トイレとシャワーの整備が必要になります。吉佐美区では、入田浜と多々戸浜には市営のトイレ、シャワーが設置されていますが、吉佐美大浜にはありません。現在設置されている区営の施設は老朽化や場所の不便さがあります。長年、市営のトイレ、シャワーの設置を要望しているところですが、整備計画をお知らせください。

一つ一つ順次整備を進めることで、市内全ての海の整備、その地に合った整備が進むことを望むものであります。

4、昨年12月議会において中村議員に質問いただいた事案ですが、吉佐美舞磯浜の道路と浜地に対する某ペンションの占用、あるいは違法かもしれない事案に対しまして、その後の解決に向けての進捗をお知らせください。

区民、住民、来訪者にとって違法と思われる状態は苦痛であり、解決は重大な関心事であります。このような事案は、放置することや長時間かけることにより既得権益的なものがはびこったり、ごね得になったりすることが起こりやすいものです。ぜひとも早い解決をお願いいたします。

次に項目2として、山についてであります。市内全域で有害鳥獣被害は深刻であり、その対策は重要な課題であります。

対策として、防護、すみ分け、捕獲を組み合わせることが必要であります。防護、捕獲については、それらの指導や対応、補助金等が担当課を中心に行われていることは評価することではありますが、なかなか効果が出ないところにこの問題の深さ、困難さがあります。

鳥獣被害軽減のために、防護や捕獲という目の前の対症療法をしっかりと行うことは絶対に必要ですが、同時にすみ分けという原因療法をしっかりと行うことが必要であります。

里山整備を進め、里と山の間、人の住む場所と獣がすむ場所の間に緩衝体をつくること、野生鳥獣との共生環境、すみ分けをつくることが必要であります。

人間社会の事情、経済の事情により30年、40年をかけて荒廃させてしまった里山を、30年、40年かけて整備していく覚悟が必要であります。そのためには、しっかりとした計画とともに、具体的な一歩を進めることが必要であります。同時に、誰がやるの回答として、人材育

成が必要ですし、地域ぐるみでの対策が必要であります。これらにつきまして、当局のお考えをお知らせください。

次に項目3として、まちについてですが、下田市の経済活性、観光活性のためには、町なかのにぎわい、町なか観光、歩いて楽しい町なかづくりが必要であります。その再生のキーワードは「食」であると思います。食をテーマに、まちの魅力、まちの楽しさを発信していくことが必要です。

「食旅」という言葉があります。食が旅の目的になってきました。テレビ番組でも食をテーマの番組、旅番組が切れ目なく放送されています。元気がなくなってきた町なかに、食による楽しい話題をつくるべきと思います。

私もこれまで金目物語、きんめだる、下田地米酒「黎明」、開国紅茶、下田がんバル等、企画運営をしてきましたが、それらを発展充実するとともに、新たな仕掛けが必要であると思います。

行政の役割は、民間に活力があるときはその支援や調整が必要ですが、民間活力が弱ければ率先して先導していくことが必要です。今、どのような状況なのか、しっかり判断をして、早く、より具体的に臨むべきと思います。当局のお考えをお知らせください。仕掛けの一つの提案として、下北沢のカレーフェスタを参考にすべきと思います。

最後に項目の4として、「ひと」についてであります。海、山、まちの課題解決には「ひと」が必要であります。この「ひと」の質と量が得られないために、物事が進んでいかない状況であります。この人の大きな手だてとして、地域おこし協力隊の募集、採用を積極的に多数行うべきと思います。

一人一人孤立した形でなく、複数の採用によりチームとして対応する体制をつくるべきと思います。また、6月議会一般質問において、浜岡議員から提案されました集落支援員制度の導入も積極的に検討すべきと思います。

各行政区の状況を把握すれば、集落支援員の必要な行政区が必ずあり、その課題解決を進めることが必要です。地域おこし協力隊や集落支援員の積極的な導入について、考えをお知らせください。

以上、雑駁であります。趣旨質問といたしますので、当局の御回答をよろしくお願ひいたします。また、再質問等が終わりましたら、最後に総括として市長よりこれらの現状把握、今後の方針への思い、考えをお聞かせいただきたいと思ひます。

以上であります。

○議長（中村 敦君） 当局の答弁を求めます。

観光交流課長。

○観光交流課長（佐々木豊仁君） それでは、私のほうからは通年型の海の魅力化と活用の推進、吉佐美大浜の市営トイレ、シャワーの整備、食をテーマにした新たなイベントの開催やシステムの構築についてお答え申し上げます。

最初に、通年型の海の魅力化活用について。通年型の海のコンシェルジュ機能として、道の駅、開国下田みなとに総合窓口「しーもん」を設置しております。体験メニューの利用件数は、令和4年度で年間約2万件、1日当たり平均50件と高い水準で利用されております。

今後につきましては、世界一の海づくりプロジェクトや仮称サーフタウン構想においてビーチの魅力を伝えるために、サーフィン、ライフセービング等のスポーツ、フラダンス等の文化、自然観察・体験等の教育といった多面的な取組を進めてまいります。

続きまして、吉佐美大浜の市営のトイレ、シャワーの整備計画についてお答え申し上げます。

吉佐美大浜のトイレ、シャワー施設等につきましては、令和8年度に整備を行う予定となっておりますが、今後、地元区と協議して規模等を検討し、整備に向けて努力してまいります。

続きまして、食をテーマにした新たなイベントの開催やシステムの構築についてお答え申し上げます。

食をテーマにしたイベントにつきましては、これまでもがんバルや赤いかキャンペーンなどを実施しております。さらに新たな取組としましては、令和4年1月14日に国交省みなとオアシス下田登録に伴い、下田市Sea級グルメとして下田市で水揚げされたカジキを使用した料理を開発し、現在ホームページやパンフレットなどによる普及促進を行っているところです。

来月の10月28、29日には、沼津市にて第14回Sea級グルメ全国大会が開催されるため、下田市からカジキのまご茶漬けを出店する予定となっております。

今後につきましても、関係課をはじめ下田市観光協会、下田商工会議所、下田料理飲食組合等の関係団体と連携し協議、検討してまいります。

私のほうからは以上でございます。

○議長（中村 敦君） 生涯学習課長。

○生涯学習課長（平川博巳君） 私からは、スケートボードパークと3X3バスケットコート

を吉佐美運動公園内のテニスコート跡地への設置ということについてお答えいたします。

吉佐美運動公園においては、少年野球を含めた軟式野球での利用と、グラウンドゴルフでの利用が主なものとなります。

議員御指摘のように、吉佐美運動公園の利活用については、テニスコート跡地の再整備を含め、必要な施設、設備、機能について検討してまいります。

市としてスポーツ合宿などの新たな取組も踏まえながら、スポーツ推進計画の策定に合わせてスポーツ施設の在り方についても検討してまいります。

以上です。

○議長（中村 敦君） 建設課長。

○建設課長（平井孝一君） 私のほうからは、吉佐美舞磯浜の道路問題についてお答えします。

道路、市道下条線の課題解決には道路用地を明確にする必要がございます。平成18年度に作成した用地測量の資料がございまして、それを基に土地所有者、宿泊施設の所有者でございます、その方に境界確認等の協力依頼をしているところでございます。しかしながら、所有者に対し再三電話、訪問しておりますところですが、本人とはまだ会えない状況です。

訪問した際に、施設の従業員と会話することができたこともございまして、その際には所有者の方に建設課のほうに電話をくださいとお願いしているところでございますが、まだ連絡が取れていない状況でございます。また、海岸空地につきましては、所管する下田土木事務所が口頭により、ビーチテラスや椅子などの撤去指導を行っておりますが、これも同様に相手方が応じないと聞いております。

これから市としましては、下田土木事務所と協議、連携し、県からもアドバイスをいただき、より実効性のある解決策を検討し今後も対応してまいります。

以上です。

○議長（中村 敦君） 産業振興課長。

○産業振興課長（糸賀 浩君） 私からは、2項目めの山についてということで、鳥獣被害対策としての里山整備による緩衝体づくり、地域ぐるみの対策についての御質問にお答えいたします。

鳥獣被害対策につきましては、防護柵の設置などの被害管理、捕獲や追い払いなどの個体管理、里山、人工林の整備や緩衝帯の設置などの生息地管理を総合的にバランスよく行っていくことが重要であると、農林水産省よりも示されております。

鳥獣の移動経路や潜み場となる森林等を整備し、見通しのよいエリア、緩衝帯をつくるこ

とは、人の生活圏に鳥獣を寄せつけない、近づかせない環境につながると言われています。

こうしたことから、緩衝帯ともなる里山の整備に向けて、現在行っている人工林の間伐事業と併せて、人の生活圏に近い里山の天然林についても間伐等の実施を検討してまいります。

また、地域ぐるみの対策としましては、一昨年度から南伊豆町との共同プロジェクトとして、鳥獣対策の専門家である「雅ねえ」こと井上雅央農学博士を招き、鳥獣対策における自助・共助の具体的な取組について勉強し、実験を展開しております。

井上氏は、国立研究開発法人農業食品産業技術総合研究機構を退職後、島根県美郷町において、鳥獣対策からコミュニティーの復活、まちおこしを成し遂げ、今なお当地で活躍し続けるとともに、地域とともに鳥獣対策に真剣に取り組む自治体の支援に奔走されている方でございます。こうした方の御支援もいただきながら、自助・共助の推進を図っていきたくと考えております。

私からは以上です。

○議長（中村 敦君） 企画課長。

○企画課長（鈴木浩之君） まず、ひとについての地域おこし協力隊でございます。

地域おこし協力隊につきましては、現在、下田市では4名の隊員が活動を行っております。隊員の受入れに当たりましては、行政及び受入れ地域等が、地域おこし協力隊の趣旨、目的をしっかりと理解をした上で、必要とする隊員について計画的に採用していくことが必要と考えております。

また、任命した隊員が地域協力活動を円滑に進めるとともに、任期後の定住・定着につなげていくために、隊員を業務面、生活面の両面からサポートする必要があるとございます。このため、本年度新たに活動支援、企業研修、日常生活のサポートを行う地域おこし協力隊サポート事業を立ち上げたところであり、また地域おこし協力隊の隊員同士の連携を深めるために、全隊員を集め、また関係課が集まりまして活動報告会、連絡会を2か月に一度開催し、情報交換、意見交換ということで行っているところでございます。

また、集落支援員制度につきましては、当市ではこれまで地縁に基づく区を中心としたコミュニティー活動が維持をされ、行政協力員等の市との連携も確保されておりましたが、近年人口減少、少子高齢化、隣組加入率の低下等の進行により、地域コミュニティーの弱体化が課題となり、区長会の会合等でも今後、将来に向けた地区の維持に対する不安の声が高まっているのが実情でございます。

したがって、現行の区制度との調整、地域のニーズの把握、人材の確保等の課題につ

いて整理するとともに、行政の支援体制の整備を進めつつ、集落支援員制度の導入について検討を進めてまいりたいと考えております。

以上でございます。

○議長（中村 敦君） 8番 楠山俊介君。

○8番（楠山俊介君） まずは御回答ありがとうございます。詳しく回答していただければ、時間も本当に足りないぐらいの内容だとは思いますが、簡単に回答いただければ、このレベルかなとは思いますが。

しかしまずは、皆さんは私のこの質問に対して、その重要性とかいうことは十分理解されていると思います。それでこの質問を機に、ぜひとも優先順位、プライオリティーを上げていただきたいということで質問をしましたので、くどくど内容に関して質問はしませんが、そのプライオリティーを上げていただくために、少しこれらのことに関して補足として私の提案や考えを述べさせていただきますので、リラックスしてしっかりと聞いて、検討というものはやるための検討であり、やらないための方便ではないと、変えていただきたいと思えます。

まず、海についてであります。海をそのようにこれからは新しい発想、これまでの考えではなく変えていかなければならない。今年もテーマになりましたが、海水浴客の減少というのがあって、これがなぜなのかというようなことが問われるわけですが、一般的には天候が、海の状況がということがありますが、そうではないんだといってスタートしたのが、宮崎県の青島ビーチパークの発想でありました。

この青島ビーチパークの資料というのを私は提示してはおりませんが、担当のほうはしっかり分かっていると思いますが、これを下田の海の活用の一つの、これは全部の海の活用には一致しませんけれど、特に吉佐美大浜の活用等には一致すると思えますので、ぜひとも参考にしていっていただきたい。

このとき、この青島ビーチパークの総括ディレクターの方の言葉で、「まずは10年ぐらい前までは大島は20万人ほどの海水浴客が来た、それが年々減って行って数万人になってしまった」なぜなんだといったときに、彼の分析は、「世の中がレジャーの多様化をしましたよという分析だが、それではないんだ」ということの中で、「海というものの生かし方、あるいは迎え方、活用の仕方が、我々地元が間違っていたんだというようなことの中でスタートした」と。

それで彼の言葉を借りますと、「人は海水浴が目的なのではなくて、海そのもの、そこで

過ごす時間を求めに来ているんだ」と。あるいは「海水浴場や海の家は夏の泳げる期間だけのことをいうが、海のある暮らしは年中すてきなもので、春や秋、冬にもその季節に応じた付き合い方がある」と、「そんな多様性のあるビーチスタイル、それらのハブになるコミュニティの創出が真の目的である」というようなことを言うておりますので、ぜひともそこから下田の海づくりもスタートいただきたいと思います。

それからこの青島ビーチパークの中に青島ビーチセンターというのがあります。これは渚の交番ということで、日本で最初にできたところだそうです。これは日本財団のプロジェクトの中で、海と安全と自然を守り、魅力を伝えるプロジェクトというようなことでの拠点づくりで、10割補助のものです。静岡県内には2か所あります。この渚の交番というシステムは伊豆半島にはありませんので、ぜひとも下田の海につくりたいということは前々からあったプランであります。以前、県のほうからも提案があったのを市のほうと上手に話が進まないで断られたというような経緯があるとも聞いてますが、もう一度、この海の大事な伊豆半島に1か所は少なくともつくりたいと、その1か所は下田であるというような気概を持って、渚の交番の導入をお願いしたいと思います。

それから海岸の事情を個性に生かすということですが、例えば外浦海岸は本当に内浦で静かなところ。これが下田市のほうからも話題で先ほども出ましたが、ユニバーサルビーチというようなことで、障害者、ハンディキャップの方々も海に本当に親しめるような環境、そういうシステムをつくらうということで実験がスタートしているようですが、ぜひとも下田の一つの海の表現として進めていただきたい。

また鍋田、大浦海岸のほうも静かで磯がありますので、シュノーケリングやサップというようなことのできる適地であります。しかしこの地域には駐車場がないということのために、海水浴客と観光客を取り込むことがなかなか難しい状況で、そしてさっきも言いましたが、ワーケーションの施設があるんですから、そのワーケーションの施設とこのマリンスポーツを合体した形の施設を進めることで、あそこの持っている海の魅力を生かしたらいかかかと思えます。

その中で、吉佐美大浜に関しましては広い駐車場、それから隣に吉佐美グラウンドがあり、ライフセーバーのハウスもありというようなことで、この全体、また後背地にはペンションや飲食店も多くありますので、そういう意味でこのエリアを青島マリンパーク等を参考にしながら、新しい海の使い方の第1号に整備していただければと思います。

その中で、先ほど言いましたが、吉佐美グラウンド内にスケボーパークということをお願い



いして、それでここは中でも新聞を見ますと、伊東で署名運動があったとか、あるいは浜松のほうで造るための計画や予算をつけたとか、いろんな話題が出ています。このスケボーパークは、かなりもう10年以上前から要望もありますし、下田市としてはどこに造ろうということでもいろいろ考えた状況もありますので、ぜひともこのタイミングを狙って、いち早く造るといふ、この話題性というのは大切にしたいと進めていただきたいと、そう思います。

それで吉佐美のグラウンドに関しましては、昨日の大西さんの質問にもありましたが、秋山選手が自主トレできるようなグラウンドにということでも有名にもなりますし、そしてスケボーに関しましては、オリンピックの種目として本当になじまれるようになり、またバスケットに関しましては、今度はパリオリンピックに出場できるというような話題にもなっております。そしてまたそこに、今度はレンタサイクルのそういうセンター等が入ってくれば、伊豆のレガシーとしての伊豆半島の自転車のまちづくり等の拠点にもなると思いますので、そういう機を逸しないような政策を進めていただきたいと、そう思います。

次に、トイレとシャワーの整備ですが、これは各浜にそれぞれ必要ですので、ぜひとも順次進めていただきたいと、そう思います。

それから舞磯浜の問題に関しましては、もう一言、早期解決しかないとありますので、相手の事情が優先ではありませんので、ぜひとも積極的に解決に向けて動いていただきたいと、そう思います。

それで山についてであります、なかなか難題だということの中で、この対策の3本柱を上手にやっていくことですが、緩衝帯をつくるという施策に関しては、言うはやすし、やるは難しのところがありますけれど、しかし始めないとできません。

それで南伊豆のほうもそういう施策をつくってやっているが、なかなか一件も進んでないというような話も聞きますが、しかしそういう施策を進めることで、解決に向けてということでもありますので、ぜひともお願いします。

その中で気になった数字がありますが、この捕獲の場合、猟銃の取得の支援をされていますがこのときに、令和3年のときには12件の要望がありながら、令和4年のときには1件になってしまった。それから侵入防止のための柵の補助金が、令和3年のときには33件、しかし令和4年のときには20件と減っていると。この原因は、やる必要がなくなったのではなく、多分それをやる人の人材が不足してきた。高齢化し、そして耕作放棄地も増えというような中で、人ができなくなってきたという現象じゃなかろうかと思っておりますので、その辺をしっかりと意識していただきたいと、そう思います。

次に、まちについてであります。新しい食の話題をつくっていただきたいという中で、下北沢のカレーフェスティバルというのを出しましたけれど、なぜこれを出したかという、一つの言い方だとこれは庶民グルメツーリズムというような言い方をしますが、あるものを上手に生かして形にしていくという一つの事例です。

食をイベント化し、あるいは話題化するために歴史だとか物語だとか、食材だとかいろんな要件がありますが、ないものをつくるには時間がかかりますし、あるものを探すのにも時間がかかります。そういう意味でありますと、今あるものを上手にして使うというには、必要なやり方かなと思います。

最後に、ひとについてであります。地域おこし協力隊、集落支援員、この人の問題の中で本当に解決策であろうと思いますので、積極的に考えていただきたいと思います。

その中で、地域おこし協力隊の採用ということで、現在6,500名ほどが採用されて、先ほど下田市が今4名ということですが、日本の中で多いところは北海道の東川町が64名という数字があります。それでこの東川町というのは、写真の町、あるいは写真甲子園というようなこと、そして移住者が多くて人口が増えている。それから関係人口を大切に、市長のキャッチフレーズでもあります、「つなぐ」という、そのテーマを本当に施策に生かしているというようなまちのようです。

それでこれらが、この地域おこし協力隊の人数が多いということと、まちづくりがいろんなアイデアを発揮し、上手にいつてるとということとイコールなのかということを考えますが、多分イコールではなかろうかと思います。

その一つの話として、これは偶然だったんですが、今度、産業厚生委員会で兵庫県の豊岡市のほうに視察研修に行くことに予定をされています。この豊岡市が50名ということで、全国で第5位の地域おこし協力隊の採用人数になっています。ぜひとも委員会のほうでの視察研修の折には、この地域おこし協力隊の迎え方、使い方、関わり方、そういうものと、そのまちのまちづくりとの関連性、そしてその有効性等を勉強してきたいなと思いますので、また帰りましたらいろいろ皆さんに提示できればと思います。

以上、長々と話しましたが、これらを参考にして、ぜひともそれぞれの施策を進めていただきながら、早く優先順位を上げて具体的な一歩を進めていただきたいと思います。

では最後に、市長のほうからこれらの問題に関しましての現状把握、そして今後の方針、お考えをお聞かせいただいて質問を終わりたいと思いますので、よろしく願いをいたします。

○議長（中村 敦君） 市長。

○市長（松木正一郎君） チャレンジングな市長として4年間、様々な事業に取り組んで、具体的には、当時オリンピックのときにきんめだるというアイデアで下田を全国にアピールしてくれた、そういう私の敬愛する大先輩でございますので、私はちょっと恐縮してしまいますけれども、勇気を奮ってお答え申し上げます。

まず、海を多面的・多角的に捉えることについては、私も全く同意見でございます。ビーチという捉え方、マリンという捉え方、オーシャンという捉え方、ポートという捉え方、そのほかにもあると思います。

ビーチ、例えば泳いだり海水浴をしたり、サーフィンをしたりライフセービングの大会をやったり、あるいはダイビング、シュノーケリング、そしてただリラックスをして海を眺めるというこういうビーチ、それからマリンとしては、例えばカジキ釣り大会でクルーザーが集まったりヨットレースが行われたり、オーシャンという考えでいけば漁業をやったり、ポートという考えでいけば港づくり、港町としての様々な機能を最大化する。産業あるいはフィッシャーマンズワーフといった、そういった空間整備を行う。そのほか自然学習みたいな子供たちのこの自然体験合宿みたいなこととか、様々な側面で海というものは、私たちは戦略的に活用することが重要だと思います。

さらに海だけではなくて山も、それからまちも全てやっぱり大切でございまして、これらに通じる概念としてグローバル、つまりグローバルでもあるんだけどグローバルである。だからここには黒船が来たわけですがけれども、その国際性と地域特性、この両方を磨くということも重要であろうかと思っております。

ひと、というのはこの中でちょっと特異な特別なもので、さすが市長をなさった方だなと今聞いておりました。先ほどのお話は達見だと思います。これに私の意見もちょっと付け加えたいと思います。

若者、よそ者、ばか者という言葉が、以前いろいろところで皆さんのほうに、もう既に人口に膾炙していると思いますけれども、実は私はこれも大切でしょうけれども、その反対の今ここに暮らす地元の人で、知恵の輪と、そして分別のある大人、こういう人たちも重要であろうと思います。

ですから市民の皆さん、私たちこの役所で働いている人間、こうした我々側、下田側の人間もしっかりと意識を啓発し、あるいはその役所の人間も育てる、あるいは若手の次の世代の人たちを育てるということが大事であろうと私は考えまして、これに力を注いできたところ

ろでございます。

金を残して死ぬのは下の下だとか言った人は確かにいまして、名を残すというのも大したことはないと、人を残すことこそが大事だということを行った方がいらっしゃいました。

100年前の関東大震災の後に、復興をリードした後藤新平という方が、たしかそれに似たことをおっしゃっていたと思います。それを今私は引用をさせていただきましたが、人を残すためには、やっぱり私たちはチャレンジをしなければならない。チャレンジをしながら鍛えていくしかないと思っています。

先ほど楠山議員がおっしゃったとおり、きちんと襟を正しながらも一歩踏み出す勇気を持って、こうしたことをこれからも市長として頑張っていきたいと思っています。

以上でございます。

○議長（中村 敦君） これをもって、8番 楠山俊介君の一般質問を終わります。